瀬戸内シゴトツクール

ニュースレター Vol.2

しまのわ HIROSHIMA EHIME

海士町のみなさんがやってきました！

2015年7月25日（日）
13:30～17:30
広島県庁 呉庁舎

■ 当日のプログラム

13:30～　はじめに
- シゴトツクールとは
- 活動の記録について

13:50～　レクチャー
- ゲスト：海士町のみなさん
- 「連携プロジェクトをつくる」

14:35～　トークセッション
- 海士町のみなさん ×studio-L
  講義「連携プロジェクトをつくる」

15:30～　意見交換会
- 「立って座ってメガホン会議！」

17:25～　おわりに

1 はじめに

海士町は人口2300人ほどの離島で、約1割が移住者です。基幹産業は漁業を中心とした一次産業が中心です。本土からはフェリーで3～4時間かかるため、瀬戸内のように気軽に来れない距離にあります。公立高校のブランド化の例として島前高校や、「ないものはない」というキャッチコピーが知られています。

この島とstudio-Lの出会いは、2007年から取り組んだ町の総合振興計画づくりでした。全8回をかけて、町の魅力や、具体的なアクションとして何をしたらいいのかということを話し合い、「島の幸福論」というテーマで総合振興計画を作りました。総合振興計画づくりは、移住者とずっと住んでいる人とが互いに話し、協力し、手を結び活動していくための対話の場としてスタートしています。

その海士町から、今回は3名の実践者を招いて、地域と連携するプロジェクトについて学びました。

2 講義「連携プロジェクトをつくる」

ゲスト講師①

株式会社たじまや（なまこ加工部門）宮崎雅也氏

群馬県出身。大学在学中の夏休みに海士町を訪れ、民宿「但馬屋」との出会いから、大学卒業後、Ｉターンし従業員として働き始める。但馬屋と共同で干しなまこの加工会社を立ち上げ、香港に顧客を持つまでに。なまこから作る珍味「ばちこ」や「このわた」の商品化など、食全般に携わる仕事をしている。

■ 仲間と共に身の丈に合った暮らしをつくる

今取り組んでいることを３つお伝えします。１つ目は、干しナマコの生産です。海士に移住後、９年間民宿に務めて、今年４月独立しました。民宿ではナマコ干しを20年前から、島外の業者の下請けでやっていましたが、自分たちでやろうと会社を立ち上げ、その会社の代表を務めています。加工場は海士町と国からの補助金で建て、私たちは、町に使用料を払い使っています。ナマコはその年によって漁獲量に差があり、養殖もしていないため資源を枯渇させないような工夫をしています。これからの漁師さんや漁業を守っていくために、私たちができることは何かと考える中で、２つ目の活動につながっていきます。

２つ目は、いろいろな小さな生業に取り組んでいます。無農薬・無化学肥料で、お米、麦、豆、綿花、自家用の野菜などを栽培したり、漁業をしています。それらを体験できる民泊も始める予定です。海士町は畑や田んぼと海が近いので、農薬などの影響は海にも無関係ではないと考えています。移動式の鶏舎を作って、鶏を草のある所へ連れて行って、虫を食べてもらっています。家の裏にはミツバチの巣箱を設置しました。妻は綿花を育て、機織りで布を作っています。ナマコの茹で汁が肌にいいそうで、「なまこ風呂」という商標までとりました。ナマコ染めの布を使い、妻はある日突然ふんどしを作ったのですが、手しごと市などで試験的に売っています。桜が切り倒されることがあれば、製材してスプーンなどのカトラリーを作って売ることもあります。いろいろな小さな生業を組み合わせて生計を立てていくことを考えています。

３つ目は、竹林整備サークル「鎮竹林」で、これは総合振興計画の中でできた取り組みです。自分の裏山から竹を切り出し、それを森林組合から借りたチッパーで粉砕し、竹チップを作っています。それを乳酸発酵をさせて野菜を作ると、肥料もいらないし、草も生えにくくなります。一人でやるにはもったいないので、町内のいろんな人に声をかけて活動

海士町の干しナマコ

移動式鶏舎

なまこ染めのふんどし

しています。メンバーは多彩で、農業を直接やっていない方もいます。竹林は放置すると土砂崩れが起こるリスクが高まるので、防災や、景観維持など色々な側面で竹林を整備し、来れるときに来れる人が来るなどゆるやかに活動しています。

今後は、山と海、田畑全てのつながりを意識しながら、身の丈に合った暮らしをつくり、発信し、仲間を増やしていきたいと考えています。

ゲスト講師②

元集落支援員　中村　誠氏

海士町出身。下水道処理事業を営み、浄化槽点検の際に電球を変えたり、買い物を手伝ったり、独自で「なんでも 10 分サービス」として高齢者の生活をサポートしている。その傍ら、集落支援員として保育園跡地を利用したコミュニティスペース「あまマーレ」の立ち上げに携わる。

■ 面白おかしく世代間交流の場をつくる

私は、海士町で下水施設のメンテナンスや各家庭の浄化槽の維持管理を仕事にしています。ライフラインを扱っているので 24 時間仕事です。小さな集落の一軒一軒まで定期的に回るため、お年寄りやひとり暮らしの方と顔を合わせることも多いです。趣味はバンドで、15 年くらいやっています。男女関係なく、I ターンや外国の人たちも交え、交流の一環だと思ってやっています。また、レスリングの指導もしています。地元の高校にレスリング部があり、そこへ優秀な人材を送り込みたいと思っています。

バンド演奏の様子

総合振興計画づくりに参加したきっかけは、商工会青年部の部長をしていたことでした。その中で考えたのは、保育園の跡地に人が集まる場所をつくり、様々な趣味の部屋をつくることでした。作ったものを売ったり、得意なことを発表したりといったことを、小さく定期的にできると良いのではと思い「海士人宿（その後のあまマーレ）」を始めました。

海士人宿では、いらなくなった古道具を集めて加工して売ったり、ケーキをの作り方を教えたりしましたが、女性や子どもばかり集まってしまったので、世代間交流になるイベントができないかと考えました。趣味が釣りなので、メバルを大きな水槽に入れて、火ばさみやラケットなどですくうイベントをすると男性も来てくれました。このイベントのために仲間で必死に 300 匹を釣ったのもいい思い出です。

海士人宿の様子

その後も使わなくなった釣り道具を安く売るなどして、海士人宿に男の人が集まってくれるようになりました。他にも、成人向けのコーナーをつくったり、面白おかしく工夫しています。

ゲスト講師③

なかむら旅館　中村徹也氏

海士町出身。大阪の専門学校で料理を学び、松江のレストランなどで働いた後、島へＵターン。「なかむら旅館」を営み、公民館のような旅館、通称「公民旅館」を目指す。13 年春、有志で「音つなぎ　隠岐島前アコースティックフェスティバル」を近隣３島合同で開催。今年も実施に向けて準備中。

■ 移住者と地域をつなぐ旅館

私は、６年前に海士町へＵターンし、大正時代から続く旅館の４代目として働いています。旅館のある中里地区は、海士町の中心部で、役場や学校、老人ホーム、診療所などの主要施設が集まっています。

長年の夢は、有名ミュージシャンと同じステージに立つことでした。都会では料理の仕事をやりながら、音楽も頑張っていましたが、都会は競争相手が多すぎました。海士町に戻ってから、自分で機会をつくってしまおうと思い、隠岐神社でアコースティックフェスを始め、夢を叶えました。今年も９月に実施に向けクラウドファンディングをしています。

Ｕターンで島に帰ってきて、島中が頑張っている雰囲気に、素直に「自分も頑張っていこう」と思いました。その反面、島から離れてしまう移住者もたくさん見送ってきました。島は会いたくない人にも会わないといけないし、噂もすぐに広まる、学校のようなもので、都会から来た人には住みにくい部分も少なくありません。まず、移住者のストレスや不安の解消が必要だと思うようになりました。田舎には都会のように映画館やボーリング、カラオケなど自分のストレスを発散させる場が全くありません。私は料理ができるので、まず移住者のためのワンコインランチを始めました。気軽に来てもらいたいと思ったのです。

旅館の大きい敷地も、宿泊者だけで使うのはもったいないと感じていました。移住者や地元の人のためにもなる旅館を作りたいと思い、「公民旅館」と呼んでいます。子ども会に使ってもらったり、紙芝居を呼んだり、宴会場でライブやビアガーデン、土曜市をしたりしています。

海士町は「ないものはない」で有名ですが、私のコンセプトは「ないものは自分でつくってしまえ」です。４月からは１泊500円のバックパッカープランを始めました。１泊500円ではもちろん採算が合わないため、旅館で働いてもらうことにしています。カウンターに立つことで、地元の人と話し、いいところも悪いところも知ってもらいたいと思っています。10 年先を見据えて、色々計画をしてやっていくのもいいのですが、やはり楽しいことでなければ続きませんし、人も巻き込めません。なのでこれからも楽しいイベントを考え続けていこうと思います。移住者に長く居てもらうためのお世話もしながら、旅館も営業していきたいです。

アコースティックフェスの様子

ワンコインランチで賑わう店内

公民旅館として紙芝居を行なう

3 トークセッション「地域と連携するプロジェクトをつくる」

studio-L
西上ありさ 氏

集落ごとの高齢者のケアをする集落支援員は、自分の本業をしながら、もう一つ仕事を持つようなものだと思います。そこに誠さんがわざわざ応募されたこと驚きました。何か特別な思いがあり応募されたのですか。

中村 誠 氏

総合振興計画の時に仕事で集落を回りながら 10 分間困りごとを手伝う「10分間サービス」を始めました。続けるうちに、高齢者一人一人の課題が見え、その困りごとを何とかしたいという気持ちで集落支援員応募することに決めました。今は、仕事中に集めた高齢者の課題を支援員と共有したり、地元出身者の立場を生かしてＩターンの集落支援員が地域になじむサポートをしたりしています。

studio-L
山崎 亮 氏

総合振興計画のワークショップにあたって、意識が高くて活動したい意欲にあふれた人が参加するのもいいのですが、その人たちが地域から浮いてしまったら意味がないので、誠さんのように地元の感覚がよくわかっている人が入ってくれたのは本当に心強かったです。「彼らが言っていることはわかるが、自分の友人にはどう説明したらよいのか」と地元住民と活動したいＩターン者の間のジレンマで相当苦労されたのではないかと思います。しかし、誠さんでなければわからないようなことをアドバイスしてくださるおかげで、他の集落支援員も助けられているのではないでしょうか。

西上ありさ 氏

宮崎さんの「鎮竹林（ちんちくりん）」の活動は 2008 年頃始まり、一旦休止状態でしたが最近取り組みを再開しましたよね。もう一度やってみようというキッカケになったのは何ですか。また、この活動にはデザインをやっている人、役場の人、農業をしている人など色々な人が参加していますが、それはどのように集めましたか。

宮﨑雅也 氏

竹チップを畑・田んぼに使うサイクルを自分の生業の一部としてやっていこうという想いがありました。移住して９年間でできたつながりで、地元の人、Ｉターンの人それぞれに声をかけました。「海に負荷がかからない農業をする仲間を増やしたい」と考えました。まずみんなで竹を切り、積極的に使っていこう、と。また、竹の利用方法を具体的に示すことで継続につながるのではないかと思います。

山崎 亮 氏

これらの話を、「海士町だからできている」と考えてしまうと、思考停止してしまってその先を考えなくなってしまうのですが、人口 2,300 人の島でこれだけ多様な人たちがいて、こんなことができているということを学び取っていただきたいです。つまり、陸でつながっているとつい遠くの人とつながろうとしてしまいますが、自分の隣近所に本当に活躍してもらえる人がいないのかを改めて目を向けてみよう、ということです。行政単位で考えると何万人という規模に目がいってしまいますが、ある範囲内で考えていけば、人口 2,000 人、3,000 人という規模の中での活動が基本です。町という自治体になっているかいないかだけの違いだと思っていただきたいです。

西上ありさ 氏

徹也さんのお話では、「楽しくないと続けられない」という点が印象的でした。もちろん悩むこともたくさんあると思いますが、海士町に帰る前と後ではその考えに変化はあったのでしょうか。また、なかむら旅館のカウンターに来た人を、誠さんがバンドに引き込んで、人前に出る機会をつくっているように、兄弟で連携しながらやっているように見えますがどうでしょうか。

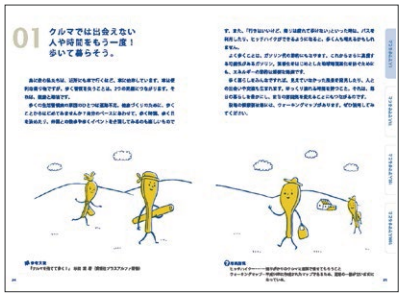
中村徹也 氏

島に戻って来たのも、兄に言われたことがキッカケになった部分もあります。元々兄が移住者と地域とのつなぎ役をしていたので、その真似をしようと思ったのです。自分だからこそできる役割というのは意識していて、島の食材を島外へ売るのは宮﨑くんたちに任せて、都会の良さも海士町の良さもわかる立場として、移住者に都会の良い部分をお渡しできればと思っています。

西上ありさ 氏

海士町の総合振興計画づくりをキッカケに、誠さんや宮﨑さんと出会ってから 10 年が経ちますが、島の将来のことや、島の人と人とがつながるにはどうしたらいいかということを真剣に話し合い、行動することで、誠さんの弟である徹也さんが島へ戻り、徹也さんもまた地域活動を実践しています。そういう人たちがいるからこそ、移住してきた人たちが住み続けたい場所になっていくのだと思います。

もっと知りたい方はこちら！



ゲストの中村誠さんと宮﨑雅也さんが関わった第四次海士町総合振興計画は、住民が話し合って作り、具体的な実現案まで提案・実行されています。中学生にもわかるようにと作られた別冊では、アイデアの提案者に似せたシャモジのイラストも。海士町役場ホームページにて閲覧可能です。

4 意見交換会「立って座ってメガホン会議！」

前回のアンケートに多く見られた「もっと参加者同士で交流したい」という意見を踏まえ、参加者のみなさんそれぞれの活動を共有できる場をつくりました。どんな思いを持ち、どんなことに興味を持って活動しているのかをお互いに発表し合いました。お互いの地域を行き来したり、個別に連絡を取ったり、参加者同士がここで生まれたつながりを深めるきっかけとなりました。

■ 今回の発表者のみなさん

A	髙島俊思（下蒲刈地域おこし協力隊）	福本成美（地ビールフェスタ）	清水規江（リクルートコミュニケーションズ）	中道大介（dise DESIGN STUDIO）	藤井ちえ（PiNECoNeS）
B	新本直登（忠海地域文化伝承協議会）	榎真理子（島の蔵 華鳩の蔵開き）	久保淳史（竹原・呉ガイド）	廿日出郁夫（みなとオアシス ただのうみ）	山本智美（照蓮寺マルシェ）
C	寄能麻里（安芸高田地域おこし協力隊）	末本尚吾（道の駅みはら）	唐井ゆかり（三原市大和町地域おこし協力隊）	南川智子（ぐるぐる海友舎プロジェクト）	勢良 寛（のろしリレー）
D	北川貴子（備後デザインサロン）	菊地永史（フクノワ）	数田祐一（天仁庵）	明木一悦 迫広進矢（小原地域振興会）	岡本礼教 岡本容子（Bridge）
E	川本良雄（えたじま郷土料理体験会）	當麻章弘 當麻順子（オキウラマルシェ）	森河万智子（中国旅客船協会）	宮崎絵美（安芸高田地域おこし協力隊）	藤田玲生（瀬戸田高校しまおこし事業部）
F	弓山淳司（JA おちいまばり）	鈴木千尋（松山市立図書館）	田窪良子（創作クラブ Grian）	田窪典子（癒しの島HAKATA）	菅 森実（しまの学校かみうらら）

■ 印象に残った話

「自身の活動を事業化したら？」との声に押されました。

しまの学校かみうららの「みかんの運動会」はコンセプトやネーミングが面白いと感じました。

音戸の天仁庵さんに行ってみたくなりました。Bridge の岡本さんのデザインも素敵！

自分の番が来た時に、聞きに来てくださった方にも声を出してもらうようにすると、話がより広がりました。

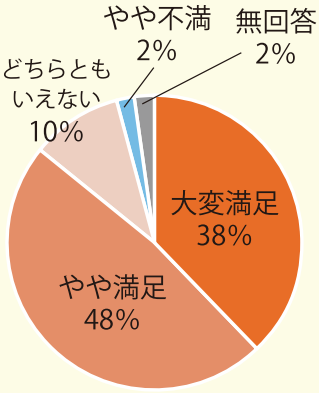
菊地永史さんの「フクノワ」で、市役所職員と一緒に取組んでいる活動について伺ったことは、今後の活動の参考になりそうです。

のろしリレーについて、直接的に区民のためになることではないかもしれないが、発信地としての誇りを持ってもらえているという考えが勉強になりました。

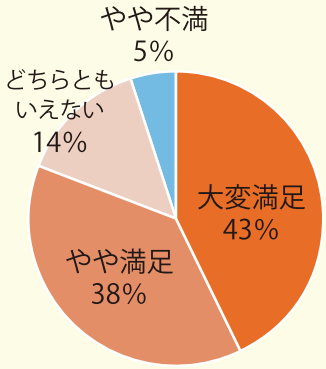
藤田ちえさんの「廃校ノスタルジア」「大竹まちあそびプロジェクト」、どれも興味深かったです。

5 参加者の声

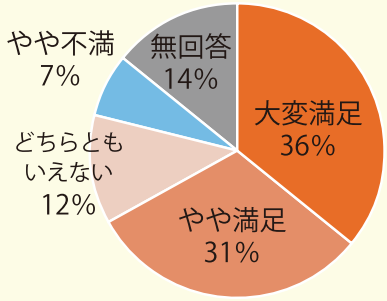
各プログラムの満足度について、参加者のみなさんからのアンケート結果は下記の通りでした。



シゴトツクール全体の満足度



講座の満足度



メガホン会議の満足度

■講座について　表と裏、知りたい部分が網羅されていた／短時間であったが、3 人の人柄、努力、継続のポイントが分かった／現場の人の生の声を聞けた／ I ターン、U ターン、地域の人それぞれの立場での話が聞けた／共感することが多く、やる気をもらえた／「楽しくないと続かない」と言うのは、間違いではないと確信できた

■メガホン会議について　限られた時間でいろんな話ができた／シゴトツクールに参加するといつも元気をもらえる／もっとうまく話せるようになりたい／声が聞きづらかった／イベントを作り上げる過程がきけた／自由度が高く、自分の活動と合った人の話を聞けた

6 次回は 9 月 26 日 (土) です

会場　三原市中央公民館
時間　13:30 ～ 17:30

次回は「地域をつなぐ拠点づくり」というテーマで、仏生山温泉旅館の岡昇平さん、建築家の谷尻誠さん、をゲストにお呼びします。「地域がつながる拠点」とは？様々な事例を交えながらお話いただきます。

仏生山温泉旅館番台　岡　昇平さん

1973 年香川県高松市生まれ。建築設計事務所「みかんぐみ」を経て高松に戻る。本業の建築設計と家業の温泉を運営しながら、まち全体を旅館に見立てる「仏生山まちぐるみ旅館」を 10 年がかりで進める。

建築家　谷尻　誠さん

1974 年広島生まれ。2000 年建築設計事務所 SUPPOSE DESIGN OFFICE 設立。共同代表の吉田愛と、広島・東京の 2 ヶ所を拠点に、住宅、商業空間を始めとする様々な分野で、国内外で多数のプロジェクトを手がける。現在、武蔵野美術大学、昭和女子大学等で非常勤講師を勤める。著書に「談談妄想」「1000% の建築」がある。

「瀬戸内シゴトツクールニュースレター」Vol.2　発行元：広島県商工労働局海の道プロジェクト・チーム
〒730-8511　広島市中区基町 10-52　TEL：082-513-3250　編集・制作：studio-L　発行日：2015 年 9 月 15 日